

連携協働の学校づくり

～大久野小学校と東京大学大学院との連携協働による認知症学習プログラムの開発～

子どもたちにとって、認知症学習プログラムを活用した学びや気づきは、認知症の理解に留まらず、自分の良さや可能性を認識するとともに、他者を価値ある存在として尊重し、多様性を認め合い、多様な他者と協働しながら、様々な社会的変化や困難を乗り越え、自己のしあわせと共に他者、社会の幸せをも実現する持続可能な社会の作り手となる基盤を育むことにつながります。

西の風新聞で紹介されました。

2023年6月1日 毎週木曜日発行 教育 weekly news 西の風 第1704号 1989年6月9日 第3種郵便物認可 4

認知症にやさしいまちに 大久野小でプログラム開発へ



小原校長(左)と取り組みを推進する町教委の平嶋一美指導室長

日の出町と東京大学

「認知症にやさしいまちづくり」を掲げ、日の出町と東京大学が覚書に基づき取り組むDFC(Dementia-Friendly Community)共創プログラムの研究・開発が間もなく始まる。小学校での授業を通して子どもたちに認知症への理解を浸透させ、多様性を認め合うインクルーシブな(属性によって排除されない)社会の実現を目指す。フィールドとなる町立大久野小学校の小原正弘校長に取り組みの意義や期待される成果、意気込みなどを聞いた。(聞き手は伊藤寛子)

小原校長が意気込み

授業の内容、スケジュール感は、「2、3年にわたる研究と聞いている。全年を対象に、子どもの発達段階に応じて認知症の知識や理解を深めるプログラムを学年ごとに開発していく。道徳、生活、総合的な学習と合わせた科目を利用し、授業時間内で年間10時間程度を充てるイメージ。具体的な内容については、これから本校の教員と東大スタッフで協議し、指導案の作成に取り掛かる。並行して年間20時間以上ある教員の校内研究の時間を全てこのプログラムに充てる」

万全の受け入れ態勢だ。

「本校の教育目標のひとつに『やさしい子』がある。生命、人権を尊重する考え、本校では、相手意識や思いやりを持ち、コミュニケーションを高める『心の教育』を重要課題としている。そうした意味で、万象繰り上げて取り組もうと手を上げた。学校としては100%新しいことに取り組みというよりも、今までやってきたことをより一層充実させる感覚だ」

期待は大きい?

「認知症や介護は特別なことではなく、非常に身近な事柄。子どもたちにとっても、学んだことが今後の実生活に生かせるという意味で大きなプラスになる。学校から取り組みを発信することで保護者や地域にも広がりが期待できる」

まず取り組むことは?

「6月上旬に今年度の研究計画を作る。研究主任には非常に意欲の高い教員を充てたが、この類の研究は授業を重ねることに子どもたちが育っていくことが実感できれば加速度的に深化する。教員の意欲も高まっていくはずだ。授業については、指導案作り、実践し、子どもたちにアンケートを取るなどして検証し、改善する。この繰り返しのなかで、指導案が作り、実践し、子どもたちにアツながる心身の成熟があつてこそ人生は充実する」という私自身の哲学からくるもの。『つながり』や『かわり』を重視する町の教育ビジョンとも通ずる部分が多く、どんな研究になるのか非常にワクワクしている」

改めて期待、意気込みを。

「ICTや外国語教育などを優先する学校も多い中、散えて『心の教育』を最優先する。福祉のまち日の出町だからその取り組みでもあるが、人とのつながりや心の成熟があつてこそ人生は充実する」という私自身の哲学からくるもの。『つながり』や『かわり』を重視する町の教育ビジョンとも通ずる部分が多く、どんな研究になるのか非常にワクワクしている」